

結婚相手を探すなら「筑波山」

下野市教育委員会
生涯学習文化課

筑波嶺の裾廻の田居に秋田刈る妹がり遣らむ黄葉
手折らな 『万葉集』（高橋虫麻呂）

※筑波山裾の田んぼで、秋の刈入れをしている
としい娘、あの子のもとに贈る黄葉の枝を折ろう。

今回は、下野市からよく見える筑波山の話。筑波山は下野市からは西側の男体山（標高八七一メートル）と東側の女体山（標高八七七メートル）の二つの嶺が、きれいに見えます。古代から神の宿る山として、富士山と共に東国を代表する山でした。山頂付近には筑波山神社や磐座と呼ばれる、神様が降臨するとされる大きな岩があり、その周辺からは奈良時代頃の土器などが出土しています。

現代では下野市から自動車を利用すると一時間半もあれば麓まで行けますが、歩くなどの位かかるとはどうでしょう？以前、南河内庁舎から筑波山まで歩いた方から、約9時間で行くことができたと言ったことがありますが。当時の道路事情や靴などの装備を考えるとこれ以上かかったかもしれません、もしかすると古代人のほうが健脚だったため、早く到着したかもしれません。

古代下野国の東隣りの常陸国（現在の茨城県）の記録である『常陸国風土記』の筑波郡・茨城郡

の項目には、「坂（足柄・碓氷の坂）より東の諸国の男女が、春の花開く時と秋の紅葉期に飲食を携え、連れ立って筑波山のふもとに集まり、飲んで食べ、歌って踊る「歌垣」がおこなわれたことが記されています。霞ヶ浦周辺の行方郡では、七月七日夜に「遊楽歌舞」が、繰り広げられたことが記されており、現在の石岡市高浜付近では、村の男子と海辺の女子が集まって歌って踊り、それらの人の集まりを見込んで、商人と農夫が船で行き交っていたことが記されています。人々が集まることには物資が集まり、臨時の市が立ち、情報が伝播し交流が生まれました。当時としては、かなり広範囲の人々が集まる一大イベントだったことがわかります。

このほか、東国から遠く離れた現在の佐賀県『肥前国風土記』にも郷閭の士女、酒を提へ琴を抱きて、年ごとの春と秋に手を携えて山を登り、楽しく飲み歌い舞って・・・と記されています。さらに、「急傾斜な山を登る際には、斜面の草を握らずに一緒に登る「妹（恋人・妻）の手を握る・・・」とあります。千年以上前から年頃の男女が出会う場所、今風に例えると「合コン」のようなことが行われていた訳です。

都から遠く離れ、文化不毛の古代東国や九州と思われがちですが、庶民はたくましく生活していたことがわかります。この時、現代と違うのは単なるおしゃべりをするだけでなく「歌」を相手に歌いかけて贈り、相手が気に入ると歌い返し、その応酬で相手の人となりや気持ちを図り、配偶者にふさわしいかどうか判断したようです。現代でも世界中の幾つかの場所で、このような風習が残っている地域があるようです。

飛鳥時代には舒明天皇が、天の香具山から眼下の山々や田畑を見下ろし「国見」をしました。この時、「（前略）うまし国ぞ 秋津島 大和の国は」（なんと実り豊かな国なのだろう大和の国は）と詠まれています。この儀式の後、皇族や貴族たちは宴会となり、飛鳥の庶民も「歌垣」を開催することが許されたことと思います。

【用語解説】

※「歌垣」は人々が垣のように（はないちもんめのように）列や円陣をつくって歌ったことから「垣」の文字が使われたようです。また、「歌懸」・「歌の掛け合いが語源とも言われています。奈良時代には「踏歌」（集団での舞踊）の語もあります。

※9月号の挿絵は、長岡京発掘調査報告書より引用しました。